

# 新課程先行実施での 中学校の変化と課題

高校の新課程は2013年度の全面実施に向け、12年度から数学と理科で先行実施される。

一方、中学校の新課程は09年度からこの2教科が先行実施され、

12年度から全面実施となる。

中学校の指導や生徒の実態はどう変わったのだろうか。

Benesse教育研究開発センターが行った

「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」の結果と、

東京都中野区立第七中学校の宮下彰校長の見解を交えて紹介する。

新課程によって今まで以上に  
教科指導の工夫が可能に

2012年度から中学校の授業時数は、3学年とも年間35時間増えて1015時間になる(図1)。各校では6時間授業の日を増やしたり、長期休業を減らしたりして対応することになる。特に理数教育については、教育内容が「とても充実する」「まあ充実する」と捉える教師が9割に上る(図2)。東京都中野区立第七中学校の宮下彰校長は担当教科である理科について次のように期待を寄せる。

「新課程では学習内容が増えただけでなく、生徒の意欲を喚起する内容となるよう工夫されています。基礎基本の定着のために振り返り学習も重視されているため、学力向上、そして学力差の解消にもつながるのではないかと期待しています」

宮下校長は、期待を実現させる上での懸念として、学習内容増加に応じた教科指導上の課題と、授業時数増による全人教育への影響の2点を挙げている。

図1 中学校における新課程での授業時数の増加

	国語	社会	数学	理科	外国語	音楽	美術	保健 体育	技術・ 家庭	道徳	特別 活動	選択教科	総合的な 学習の時間	合計
1年	140(4)	105(3)	140(4)	105(3)	140(4)	45(1.3)	45(1.3)	105(3)	70(2)	35(1)	35(1)	-	50(1.4)	1015(29)
	0	0	+35	0	+35	0	0	+15	0	0	0	0~-30	-20~-50	+35
2年	140(4)	105(3)	105(3)	140(4)	140(4)	35(1)	35(1)	105(3)	70(2)	35(1)	35(1)	-	70(2)	1015(29)
	+35	0	0	+35	+35	0	0	+15	0	0	0	-50~-85	0~-35	+35
3年	105(3)	140(4)	140(4)	140(4)	140(4)	35(1)	35(1)	105(3)	35(1)	35(1)	35(1)	-	70(2)	1015(29)
	0	+55	+35	+60	+35	0	0	+15	0	0	0	-105~-165	0~-60	+35
計	385	350	385	385	420	115	115	315	175	105	105	-	190	3045
	+35	+55	+70	+95	+105	0	0	+45	0	0	0	-155~-280	-20~-145	+105

注1) 上段数字は時間数、上段( )内は週当たりのコマ数、下段数字は今回の学習指導要領の改訂での増減時間数

中学校の課題① 教科指導上の課題

新課程を読み込み  
指導に強弱を付ける

まず、教科指導の課題について見ていこう。例えば、理科では学習内容の増加を反映し、新しい教科書の平均ページ数が従来の教科書の1.5倍近くに増える。

「授業時数が増えたとはいえ、どの単元も満遍なく教えていると時数が不足し、教え切れない内容が出かねません。教師が教科書を先に進めることばかりを意識することも懸念されます。そうなること、教える量は確保できたとしても、生徒の関心を引き付けることは出来ません。結果として、生徒は中学校の学習内容を身に付けられないまま高校に進学することになります」(宮下校長)

そうした事態を防ぐには、新課



東京都中野区立第七中学校  
校長 宮下彰 みやした あきら  
教職歴38年。同校に赴任して1年目。専門教科は理科。2009年から11年まで全国中学校理科教育研究会会長。

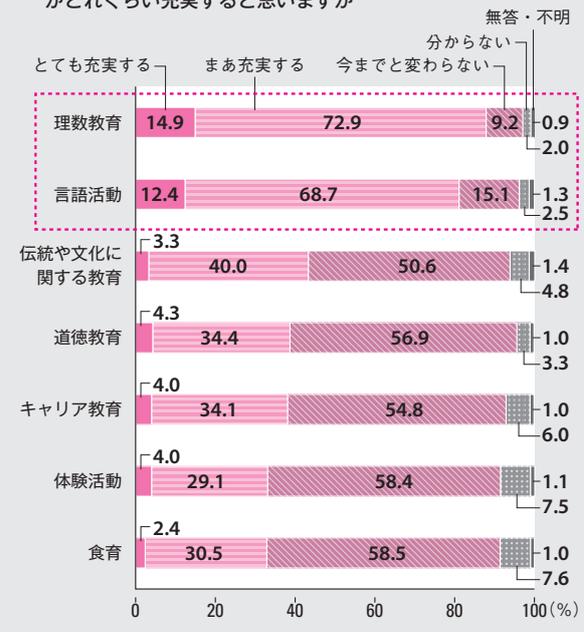
程の内容理解が不可欠だ。新課程の示す学習内容には、「…を認識させる」「…に触れる」など表現に違いがある。これを教科指導の目安にすべきと宮下校長は話す。

「新課程の表現に基づき、実験や観察を通して生徒に深く考察させるところ、口頭での説明で済ませるところなど、内容によって強弱を付けた指導が求められます。教師が新課程を読み込み、指導内容を精査する必要があるのです。そうすれば、教科書の量に引きずられず、増加した学習内容を限られた時数の中でしっかり教えられようと考えています」

逆に、教師が重要と判断した事項は、新課程での表現にとらわれず指導の充実が求められるという。「例えば、放射線の分野については『触れる』と表現されています。しかし、現在の日本で暮らす上では、放射線について社会に流布する情報に惑わされないだけの正確な知識を教えた方がよいと考えます。この学びを基に、将来、生徒が自ら判断できる力を培ってほしいと思います」(宮下校長)

図2 新課程実施による教育活動の充実度

Q. 新学習指導要領の実施によって、次のような教育内容や活動がどれくらい充実すると思いますか



注1) 「とても充実する」+「まあ充実する」の合計の上位7項目を抜粋し掲載  
注2) 調査対象は、全国(東北6県と茨城県を除く)の中学校(国立・公立・私立)の主幹教諭・教務主任(配布数9,254人、有効回答数2,839人、有効回答率30.7%)

出典/ Benesse教育研究開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」(2011年6~7月)

教師が新課程について共通理解を持つためには、国や自治体、各研究会が研修の場を設けることが重要とも、宮下校長は話す。

「ベテラン教師の中には以前の課程で教えていた内容が戻ってくるだけという意識の者もいます。新たな内容もあるので学び直す必要があります。また、若手教師にとっては指導分野が増えて戸惑いがあるはず。しかも、地域によっては学校が小規模化し、教科担当が1人しかないことも珍しくありません。そのため、校

内で教科指導を学べる環境にない教師もいますから、複数の学校が集まって研修をする必要があると思います。私のかかわる全国中学校理科教育研究会では、全国の先生方のための研修会を開き、多くの中学校で孤独と多忙化の中で頑張っている先生を少しでも支援したいと考えます。新課程移行期だからこそ、授業力の向上が必要で、指導のばらつきを解消することで、生徒の理解度の差を是正していくことも出来るでしょう」

学習内容の増加に対して、半数

\*プロフィールは2012年3月時点のものです

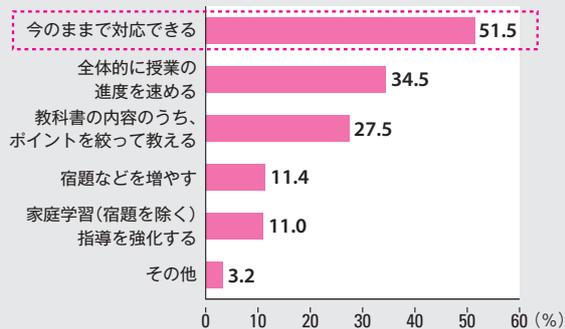
以上の教師は「今のままで対応できる」と捉えている(図3)が、教科指導に新たな工夫が求められることになりそうだ。更に、新課程で重視すべきとされたポイントも、どう授業に取り入れるかも重要な視点だと、宮下校長は話す。

「今回の改訂では、年間を通じた継続的な観察が重視されています。これは、理科の本質的な面白さを生徒に伝える好機です。実験や観察は手間が掛かりますが、しっかりと活用できるように手立てを講じる価値はあると思います」ところが、半数以上の教師は「実験・観察時数の確保」について不安を感じている(図4)。

「根本的な解決には、教師の加配など、行政による支援が必要だと思えます。学校に出来ることは、地域や外部人材の力を借り、少ない準備時間で効果的な学びを生む工夫です。本

図3 新課程における学習内容増加への対応

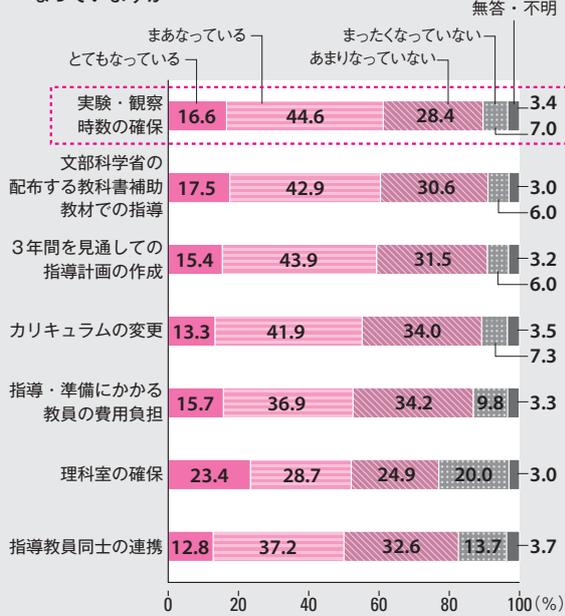
Q.新学習指導要領における学習内容の増加に、どのように対応する予定ですか



注1) 複数回答  
注2) 質問対象は、全国(東北6県と茨城県を除く)の中学校(国立・公立・私立)の中1・中2・中3の理科担当教員(配布数27,772人、有効回答数7,042人、有効回答率25.4%)  
出典/Benesse教育研究開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」(2011年6~7月)

図4 理科の先行実施における課題

Q.理科の先行実施に取り組む中で、次のようなことは課題になっていますか



注1) 「とてもなっている」+「まあなっている」の合計の上位7項目を抜粋して掲載  
注2) 調査対象は、全国(東北6県と茨城県を除く)の中学校(国立・公立・私立)の中1・中2・中3の理科担当教員(配布数27,772人、有効回答数7,042人、有効回答率25.4%)  
出典/Benesse教育研究開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」(2011年6~7月)

言語活動を取り入れた授業で生徒の学習意欲を高める

言語活動は新課程で重視されている活動であり、図2にあるように、約8割の教師が新課程の実施後に充実すると捉えている。宮下校長は、日本科学技術振興財団や大学などから研究者や教授を講師として招き、実験や講話などをしてもらいました。専門的な内容を分かりやすく伝えられ、生徒の関心を引き出せたと思います(宮下校長)

校長は、充実した言語活動を取り入れるためには活動の狙いを固めるべきだと話す。「授業にディベートを取り入れる中学校はたくさんあります。しかし、スムーズに取り組むことに注力するばかりに、言語活動の本来的目的を見失っていることも見受けられました。生徒にどのような力を付けさせたいかを学年や教科の先生方と共にじっくり話し合い、目的意識を共有する必要があるでしょう。本校では、言語活動を11年度の校内研究のテーマと

し、新課程の全面実施を前に、改めて教師全員にその意義を見つめ直してもらいました」言語活動を取り入れることで、授業の中で効果的な学びが得られるだろうと、宮下校長は話す。「例えば、実験で1つのグループが違う結論を出したとします。私ならば、教師が答えを言わず、なぜ違う答えなのかを生徒に考えさせます。友だち同士の意見交換は、教師から解説を聞くのとは違う新鮮さがあるはず。これまでも重視されてきた発信力や表現

力に加えて、今後は、他人の意見を聞いて自分の意見を修正する力が求められると感じています。そうした力の育成を教科横断で行うことが、効果的な学びにつながるでしょう」

## 中学校の課題② 全人教育への影響

### 授業以外に生徒の頑張りを認める機会をつくる

2つめの課題は、授業以外に教師が生徒とかかわる時間をいかに確保するかだ。授業時数が増えたため、逆に授業外の時間が減ってしまい、12年度から部活動や生徒会、特別活動、行事などが精選される可能性が出ているからだ。

教師にとっては、今まで以上に教材研究などの負担が増すと考えられる。12年度以降、教師の多忙化が加速することを不安に感じる教師は、9割近くを占めている(図5)。何も手立てを講じなければ、教師と生徒のかかわりは減ると予測される。

「中学校は教科学習だけでなく、生徒の全人教育の場でもあり

ます。友だちと触れ合い、目標に向かって一緒に努力する時間も十分に確保しなければなりません。学習以外のことで教師や友だちから頑張りを認められる経験が不足してしまうと、勉強が苦手な生徒は学校で自己肯定感を得る機会が減ってしまいます。これにより、何事にも意欲を見出せない、無気力な生徒が増えないかと危惧しています」(宮下校長)

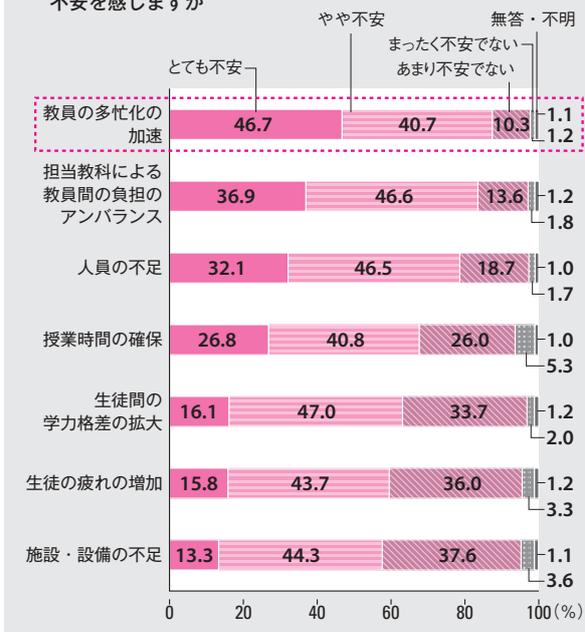
こうした事態を防ぐために、中学校には、教師の負担が大きくなり過ぎないように配慮しながら、教師が生徒と触れ合う時間を授業以外に設ける工夫をする必要があると、宮下校長は考えている。

一方、「総合的な学習の時間」の授業時数は少なくなる。この時間を進路学習に充てていた学校では、進路学習の時間をどう確保するかも課題となる。

「進路学習の時間が減れば、これまで以上に進路意識が希薄な生徒を高校へ送ることになりかねません。本校では、高校から先生を招いて講話してもらったり、生徒を高校の授業見学などに参加さ

図5 新課程全面実施における不安

Q. 新学習指導要領の全面実施にあたり、次のことにどれくらい不安を感じますか



注1) 「とても不安」+「やや不安」の合計の上位7項目を抜粋して掲載  
 注2) 調査対象は、全国(東北6県と茨城県を除く)の中学校(国立・公立・私立)の主幹教諭・教務主任(配布数: 9,254人、有効回答数: 2,839人、有効回答率: 30.7%)

出典/ Benesse教育開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2011」(2011年6~7月)

下校長は話す。

せたりして、高校との連携の強化を図っています。高校の先生から説明を聞くことで、生徒は高校への関心を高めます。例えば、『SHで専門的な理科の授業が受けられる』『学校で友だちと学習できる自習室を確保している』といった話に、生徒は心を動かされます。中学生も中学校教師も、高校のことをもっと知り、中高の学びが接続するように工夫していきたいと考えています」(宮下校長)

また、高校にも中学校のことを知る機会を得てもらいたいと、宮

「高校の先生方に、多様な生徒がいる中学校の様子を肌で感じてほしいと思います。中学校では、さまざまな生徒について小学校と情報交換をする連絡会などを設け、教師と生徒のかかわりが円滑になるよう工夫をしています。同様に、中学校には高校の教育活動を考える上でのヒントがあるので、ぜひつながり合うことで、生徒の学力も人格もしっかり伸ばしていきたいと考えています」